エージェンシーに関する教育の課題と可能性

＜話題提供＞

東京学芸大学
松尾　直博

1

（2020年3月11日(水) 15時～17時30分にオンラインで実施）

よろしくお願いいたします。私のほうから話題提供ということでエージェンシーに関する教育の課題と可能性についてお話しさせていただきます。

１．エージェンシーと＜生きる力＞、新しい学習指導要領

2

まず、最初にエージェンシーと＜生きる力＞、新しい学習指導要領との関連についてお話しさせていただきます。このことに関しては鈴木さんや、木村先生からもお話があったように、エージェンシーを育てるということは、日本の教育にはない、まったく新しい別物をするということではなくて、特に新しい学習指導要領に反映されているのではないか、と考えております。日本的文脈におけるエージェンシーという位置づけ、価値づけについてお話していきたいと思います。

自らを個人と社会のウェルビーイングに向けて
方向づける意志や力⇒　生徒エージェンシー

3

まず、ラーニング・コンパス2030です。これに関しては鈴木さんの方から詳しくお話しいただいたところもありますし、木村先生からその経緯もお話しいただいたところです。やはり、この図の特徴としては、多くのこういうモデルというのは四角とか丸が組み合わさった幾何学的な図から作られたものが多いんですけれども、このモデルの特徴はコンパスであるとか人であるとか、有意味な絵から構成されているというところが一つ特徴かなと思います。特にエージェンシーを、人の姿として構成要素を独立して描いているということ、それからウェルビーイングを目指すべきものとして独立して構成要素を描いているところに重要な意味があるのかなというふうに思います。

新しい学習指導要領と＜生きる力＞

◇2000年代の＜生きる力＞
「**ゆとり**」の中で＜生きる力＞を育む
◇2010年代の＜生きる力＞
「**確かな学力**」に焦点を当て＜生きる力＞を育む
◇2020年代の＜生きる力＞
「**よりよい社会と幸福な人生の創り手**」となるための
＜生きる力＞を育む　≒　エージェンシーを重視

⇒　エージェンシーを日本の新しい学習指導要領の下で育てることが可能と思われる。

4

そして、鈴木さん、木村先生の方からもお話あったように、エージェンシーというのは、今のところはあまり馴染みのある言葉、概念ではないですけれども、日本の教育と非常に共通しているところは大きいと思います。その中で私は「生きる力」という言葉に注目してみました。「生きる力」という言葉自体は日本の教育の中で20年ほど前から言われていることですが、学習指導要領やそれに関する答申などを見ると、時期によってとらえ方がちょっとずつ違うんですね。強調点というか、焦点の当て方が。最初、2000年代、おおざっぱに2000年始まったところの「生きる力」というのはゆとりの中で生きる力をはぐくむといいうことが強調されていました。その後2010年代になると、「生きる力」の中でも知的な側面である「確かな学力」に焦点を当てていくという言葉がよく使われて来ていました。そして新しい学習指導要領、おおざっぱに2020年代の「生きる力」という表現をさせていただいているんですけど、これをどうとらえていくか。私が着目したのは、「よりよい社会と幸福な人生の創り手」となる力を育むということが書かれているんですね。これは偶然ではなくて、木村先生、それから鈴木さんの話から考えると、OECDの研究と日本の目指すところがリンクしているからだと思います。いわゆるエージェンシーを重視した教育、「よりよい社会と幸福な人生」というところに、個人のウェルビーイングと社会のウェルビーイングという言葉が入っていると解釈できるので、それに向かっていくエージェンシーを重視した教育というのがこれからますます求められている。なのでOECDの考えるエージェンシーを育む教育というのは、特にこれからの日本の教育の目指すところとリンクしているというふうに思っています。

「生徒エージェンシー」に関連した鍵となる構成要素

Student Agencyのコンセプトノートより（OECD,2019)

生徒エージェンシーは，アイデンティティと所属感の発達と関係がある。生徒がエージェンシーを発達させるとき，ウェルビーイングに向かって自らを方向づけていく動機づけ，希望，自己効力感，グロース・マインドセット（能力と知能は発達させることができるという理解）に基づいている。このことによって，生徒たちは目的意識を持って行為することが可能になり，社会において持続的幸福を感じ，生き続けていく方向づけをすることが可能になる。

⇒　エージェンシーは、情意や態度等に関わる要素と関係が深い

5

また、エージェンシーを理解するヒントとして、コンセプトノートの中に、関連した鍵となる構成要素が書かれています。正式な日本語訳は近いうちに発表されると思いますが、これは原文から私が訳したものになります。アイデンティティとか所属感がウェルビーイングに向かうということが書かれていますし、それから動機づけ、希望、自己効力感、グロース・マインドセット。それから目的意識というものがエージェンシーと関連が深いということが書かれています。これはいわば、日本の言葉でいうと情意や態度にかかわる要素と関連が深い資質・能力なのかなというふうに思いますし、このスライドで書かれていることがエージェンシーを理解するヒントになるのかなというふうに思います。

２．エージェンシーに関係する日本の課題

6

次のところでは、日本の課題ということで少し考えさせていただければと思います。

PISA2018の結果から
エージェンシーを考える

- 義務教育修了段階の15歳児を対象に、2000年から3年ごとに、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野で実施。加えて質問紙調査を実施。日本は、高校1年相当学年が対象で、2018年調査は、同年6～8月に実施。

- 質問紙の中には、ウェルビーイングやエージェンシーに関わる項目が含まれている。

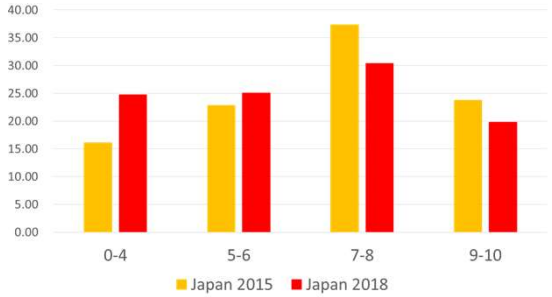
7

鈴木さんの方からもお話がありましたが、私もPISA2018の結果に着目してみました。かなり色々な情報が含まれていて、重要な結果だと思います。特に質問紙の中にはウェルビーイングやエージェンシーに関わる項目が含まれていて、今日は主に生徒自身が回答した質問紙の結果について述べていきたいと思います。

PISA2018質問紙における ウェルビーイングに関する変数

PISA2018における変数	日本の順位
生活満足度	67位/70カ国中
主観的幸福（ポジティブ感情）	61位/70カ国中

日本の生徒の生活満足度　2015年　6.80　→　2018年　6.18



8

まず、ウェルビーイングに関する変数です。慎重に考えなきゃいけないのは、これから説明する変数がウェルビーイングの一側面でしかないということです。ひとつは生活満足度、もうひとつは主観的幸福感ですね。主観的幸福感は、原文がsubjective-wellbeingとなっているぐらいですから、やはりウェルビーイングと関係する変数になると思います。これらの得点について、日本の状況としてあまり高くないです。いろんな要素が含まれていますし、生徒自身が回答しているというところも関係すると思いますが、生活満足度の得点はあまり高くなくて、さらに2015年から2018年にかけて低下傾向が見られます。それから主観的幸福感です。良い感情をたくさん経験して、ネガティブな感情が少ないとこの得点が高くなるんですけれども、これもあまり高くないという結果がみられています。

PISA2018質問紙における エージェンシーに関する項目

E2030で示された鍵となる構成要素
◇アイデンティティ
◇所属感
◇動機づけ
◇希望
◇自己効力感
◇グロース・マインドセット
◇目的意識

PISA2018における変数	日本の順位
学校生活（学校への所属感）	22位/75カ国中
達成目標	73位/77カ国中
30歳の時の職業（将来職業地位期待）	76位/78カ国中
粘り強さ（についての自己効力感）	77位/77カ国中
知能の増加への考え（グロース・マインドセット）	14位/77カ国中
人生の意義	73位/73カ国中

9

次はエージェンシーに関する項目です。スライドの左側の方には、先ほど説明した、コンセプトノートに書いてある鍵となる構成要素が書いてあります。それから、PISA2018にそれに関する変数というのを右側に挙げていますが、ここもやはり慎重に解釈しなければいけません。エージェンシーというのが特に測定しにくかったり、数値で表現しにくかったりするものでありますので、「E2030で示された鍵となる構成要素」と「PISA2030における変数」が必ずしも一致しているわけではなく、あくまで一側面を反映しているものとして理解していく必要があると思います。PISA2018における変数の用語は、国立教育政策研究所のものを使っており、括弧のところは原文を元に私が補った説明になります。学校の所属感というのは、比較的高く、日本の生徒たちは学校への所属感はある程度感じているのかな、と思います。それから達成目標ですね、心理学でいうと熟達目標というものに近いと思うんですけれど、より学びたい、色んなことをマスターしたいという目標をおいているかに関してですが、これは高くないという結果がでています。将来職業地位期待というのは、30歳になったときに自分がどういう職業についているかというのを自由記述したものを国際的な基準で数値化して、社会経済的地位が高い職業に就いていると予想している場合は得点が高いということになりますが、これはあまり高くないという結果がでています。それからねばり強さ、レジリエンス、についての自己効力感ですね。困難な状況でも乗り越えられそうかということに関してこれも高くないというような結果があります。グロース・マインドセットは、知能が自分の力で変えられると思うかということです。これは、比較的日本の子どもたちは高くつけていて、知能というものは自分の力で変えられるんじゃないかというふうに感じていることが明らかになっています。それから人生の意義ですね、自分の人生に意義や意味を見いだせているかということに関しての項目ですけれども、これも高くないという結果がでています。これらは本当にエージェンシーの一側面、一例にすぎず、測定できているものがすべてではないのですけれども、こういうところに日本の子どもたちのエージェンシーに関する課題がある、というふうに考えて、あるいはこれを伸ばすということの重要性が示されているのかなというふうに思います。

３．エージェンシーを育む教育実践

10

では、エージェンシーに関係する、日本の課題、このような課題を踏まえて、どういう教育が必要なのかを考えていきたいと思います。

エージェンシーを育む
授業や活動の例

①東京学芸大学附属竹早小学校・幼稚園竹早園舎
　2年生　自己実現活動

②東京学芸大学附属竹早中学校
　3年生　特別の教科　道徳

③東京学芸大学附属竹早中学校
　2年生　国語科

11

今日紹介するのは、東京学芸大学附属の小学校・中学校の例です。竹早地区というのは、長年に渡って幼・小・中の連携で、主体性を育むということに関しての研究を続けています。なので、エージェンシーそのものではないかもしれませんが、OECDのいうエージェンシーに近いものを、どうやって育てていけば良いかという実践や研究を積み重ねてきている附属学校園と言えると思います。

①竹早小学校・幼稚園竹早園舎「自己実現活動」

「自己実現活動」とは、幼児、児童の生活に即した課題、活動、体験を重視しつつ、教科等の枠にとらわれずに総合的に進めていく活動である（教育課程特例指定校になっている）。

12

まず小学校の事例です。竹早小学校、それから幼稚園舎では、自己実現活動というものがありまして、それは幼児・児童の生活に則した課題・活動・体験を重視しつつ、教科等の枠に囚われずに総合的に進めていく活動であります。この活動に関して、竹早小学校・幼稚園舎は文部科学省の教育課程特例指定校になっています。

小学校2年生
「しょくぶつを育てよう」

- 学期始めに、クラスでやりたいことを出し、話し合い、行う活動を絞っていった。
- その際に、「クラスの喜びだけではなく、人を喜ばせるという視点を入れて、活動を考える」ように教師が提案した。
- その結果、「植物を育てる」「動物を飼う」「人を知る」の３つに絞られ、その中から早めにスタートをする必要がある「植物を育てる」活動に着手することになった。

13

今日紹介するのは、今年度の2年生のあるクラスの取り組みです。「植物を育てよう」という一連の活動です。まずは、学期初めにクラスでやりたいことについて、子どもたちから意見を出していって話し合って、行う活動を絞っていきました。その際に教師のほうから「クラスの喜びだけではなく、人を喜ばせるという視点を入れて活動を考えるように」提案しています。その提案を基に子どもたちと教師が話し合って絞っていく中で「植物を育てる」「動物を飼う」「人を知る」というのを年間に渡ってやりたいということが決まってきました。まず順序から考えて、「植物を育てる」ということから始めていこうということで、学期初めから取り組んでいます。

活動の実際（一部抜粋）

- 育てる植物（野菜）を決め、育てることの注意点を調べ、栽培する。
- 収穫した野菜を家族等に食べてもらう。
- 学んだことを竹早祭（文化的行事）で発表する。
- 活動を振り返り、改善し、冬野菜にも挑戦する。

14

たくさんの活動が行われていますが、その一部として、育てる植物を決めて、育てることの注意点を調べ、実際に栽培をする活動がありました。そして、収穫した野菜を家族等に食べてもらい、学んだことを竹早祭という文化的行事でお客さんとか、他の学年の子どもたちに発表していきました。それから、活動を振り返って、改善し、冬野菜にも挑戦したというという一連の活動が実施されました。

活動の様子

(植物を育てるために必要なことを個人やチームで考える）

掲載なし

15

これはある日の活動ですけれども、初期のほうですね。苗が届き、これから自分たちが育てるに野菜についてどういうところを注意すればいいか、何を考えればいいかっていうのを個人やチームで考えています。基本となる資料は教師が配っていますが、子どもたちが個人で調べたり、考えたり、友だちと話し合ったり、先生に聞きに行ったり、あるいはもうすでに家族から情報を貰っているような子どもたちもいます。

自発的にプランターの深さを測り始める

掲載なし

16

この活動の中で、自発的にある子どもたちがプランターの深さというのを測り始めます。どのプランターを自分の野菜、友達が野菜を育てるときに使ったらいいかということで、自発的に測り始めています。真ん中あたりにセロハンテープを置いてありますけれど、ただこの子たちは測っただけじゃなくてメモ用紙に何cmと書いて、仲間のために貼っていくような活動を自発的にやっていました。

エージェンシーとの関連

植物を育てるという目標、それを達成する方法、活動内容、あるいは育てるために必要なことを調べたり、育てる手順についても、教師が一方的に決めたものではなく、児童の発案を中心に決めていく。

⇒ **エージェンシーの主体性の側面**

収穫した野菜を誰かに食べてもらう、得た知識を文化的行事で発表するなど、学びを自分たちのためだけではなく、誰かのために役立てようとする。

⇒ **エージェンシーの責任感の側面**

17

エージェンシーとの関連に関しては、今日紹介する3つの実践とも青字で示している2つの側面からまとめさせていただいております。植物を育てるという目標、それを達成する方法、活動内容、あるいは育てるために必要なことを調べたり、育てたりする手順についても、教師が一方的に決めたものではなく、児童の発案を中心に決めていきます。目標や方法を共同構築していったということですね。それから収穫した野菜を誰かに食べてもらう、得た知識を文化的行事で発表するなど、学びを自分たちのためだけではなく、誰かのために役立てようとするといった責任感の側面も見られました。

②竹早中学校
「特別の教科　道徳」

3年生の道徳科の授業では、中学校生活3年間の集大成として、自らを見つめ、他者を理解し、社会や世界に目を向けられる人格形成をはかった。そのために、３年生では、社会の一員としての行動を考える『世界観』を意識することを重点的な目標とした。

本実践は『モラルジレンマ』という「学びを深める場」を用いて、その場を〈成立させる〉ためにどのような視点があるのかを明確化する。

18

続いて中学校3年生の道徳科の授業です。竹早中学校の今年の3年生では、社会の一員として行動を考える、世界観を意識するとことを重点的な目標として道徳科の授業に取り組んでいました。竹内さんの先ほど発表されていた、「自分ごとにしていく」、社会の一員だということ、自分ごとにしていくところを目指しているとも言い換えられると思います。特に、本授業ではモラルジレンマという手法を用いて、どう学びを深めていくかというところも着目した実践でもあります。

授業展開

- 『こうのとりのゆりかご』（荒木，2013）の資料については、生徒に事前に配布し、授業までに読んでくる（生徒の中には、関連する資料について自主的に調べてきている生徒もいた）。
- 『こうのとりのゆりかご』を設置すべきか否か、ワークシートにその判断／理由づけを記入させた後、主にクラス全体によるモラルディスカッションを行う。
- ディスカッションにおいて教師は気づきを促したり、矛盾点に気づかせるような発言を行うが、あまり細かな発問は行わない。討論内容の焦点化は自然に生徒が行うことが期待される。

＊「こうのとりのゆりかご」は、熊本市の慈恵病院に設置された、育てることができない赤ちゃんを預かる仕組みであり、『こうのとりのゆりかご』（荒木，2013）は そのことについて道徳科の教材としたものである。

19

授業展開ですが、下に説明書きをしてありますが、「こうのとりのゆりかご」という、熊本市の慈恵病院に設置された、育てることができない赤ちゃんを預かる仕組みについて、教材科されたものを使っています。通常の道徳科の授業とは違って事前に資料を配布して、生徒たちは授業前に読んできていますし、関連した資料を自主的に調べてきた生徒もいました。議論のポイントは「こうのとりのゆりかご」を設置すべきか否かということです。「こうのとりのゆりかご」の設置を増やしていく、他の病院等でも増やしていくべきか、それともそうしない方がよいのかということがポイントになります。教師は気づきを促したり、矛盾点に気付かせたりするような発言をおこないますが、あまり細かな発問は行いません。議論の内容の焦点化は自然に生徒自身が行っていきました。

授業の様子

（生徒が主体的に論点を焦点化しながら
モラルディスカッションを展開）

掲載なし

20

これは実際の授業の様子です。公開研究会だったので参観者がたくさんいますが、このようなかたちで活発な議論が行われています。

授業の実際

- 命を大切にしたいという考えを全員が共通して持ちながらも、目の前の命を救うために『こうのとりのゆりかご』を設置すべきという意見と、『こうのとりのゆりかご』の設置だけでは根本的な解決にならないので、社会保障を整えるべきだという意見が軸になり、熱心な議論が行われた。
- 子どもを産み、育てることについてもっと学校等で教育を行うべきだという論点にも生徒が焦点を当てた。このような施策や教育をしたらよいのではという提言の意見も数多く述べられた。

21

授業の実際として、命を大切にしたいという考えを全員が共通して持ちながらも、目の前の命を救うために『こうのとりのゆりかご』を設置すべきだという意見と、それでは根本的な解決にはならないということで、教育を充実させたりとか、福祉政策を充実させた方がよいのではないかという意見が出ていて、活発な議論が繰り広げられました。

エージェンシーとの関連

「生命の尊重」という大きな議論のテーマはあるが、細かな議論のポイントは教師主導ではなく、生徒同士が対話をしながら、自在に展開する。

⇒ **エージェンシーの主体性の側面**

社会の一員としての行動を議論し、考えることにより、自分たちが社会を変えていきたいという動機づけを高める。

⇒ **エージェンシーの責任感の側面**

22

エージェンシーとの関連ですけれども、授業の進め方として教師がある方向に議論を強く誘導していくのではなく、生徒達が何について話し合いたいか、福祉のことなのか、教育が大事なんじゃないかということなどについて、生徒の方が話し合いのポイントを決めて進めていったという特徴があります。もう一つは、やはり当事者意識というか、社会の一員として自分たちが変えていけるんじゃないかという気持ち、変えていきたい、という気持ちが見られました。そういった側面についても育むことができたのかなというふうに思います。

③竹早中学校2年生　国語科

「七夕単元　文化的行事を文学としてたどる」

- OECDのEducation2030の生徒エージェンシーの説明ページに映像が選定されている（全2分57秒）。
- 紹介タイトルは”Agency and co-agency in national language instruction”（「国語科授業におけるエージェンシーと協同エージェンシー」）。
- 教科の中でエージェンシーを育む例として、紹介されている。
- 授業動画を「21CoDOMoS」で視聴することが可能である（全50分23秒）。

23

それから三つ目の実践になります。これはOECDのHPでも取り上げられている、中学校2年生の国語科の授業です。「七夕単元　文化的行事を文学としてたどる」という実践です。OECDのHPにエージェンシーのところで紹介されていますし、また「21CoDOMoS」という本学が作ったシステムの方で、授業を動画でみることができます。

授業の概要・実際

１．課題について、個々の調べ学習のレポートを見直す。

２．グループ（4名）で3つの課題、「昔話」「行事」「和歌」について学習内容を共有する。

３．同じ課題の他のグループ同士で交流し、発表内容を検討する。

４．ふりかえりを書く

24

この授業の概要・実際としては、七夕について昔話、行事、和歌についてそれぞれ、これまでの課題で調べてきています。それをまず、自分たちのグループで話し合い、そのことを同じ課題の他のグループと交流して、そのあと次の授業の発表内容を自分たちのグループで検討し、発表会にむけて準備を進めるという形で進められた授業です。

授業の様子

（グループのメンバーと発表の準備を進める場面）

掲載なし

25

れは授業の最後のところで、次回の授業に向けて発表準備をしているところです。ホワイトボードなどを活用しています。

エージェンシーとの関連
（OECDのHPに掲載）

予想外の発見や知識を得ることにより、もっと学びたいという知的好奇心や動機づけが生じる。

⇒　エージェンシーの主体性の側面

知的好奇心が高まったことにより、古典を大切に守り続けていきたいという責任感が生じる。

⇒　エージェンシーの責任感の側面

26

エージェンシーとの関連です。これはOECDのHPに掲載されている動画で示されている記述ですが、予想外の発見や知識を得ることにより、もっと学びたいという知的好奇心や動機づけが生じる、生徒がもっと知りたいということを動機づけとして高めていっているというところがあります。それから二つ目、古典を大切に守りつつ続けていきたいという責任感を生じるという側面で、授業後のインタビューで生徒が答えているんですが、古典というのを守っていくべきだとか、日本の古典を世界中に発信していくことはいいんじゃないかということを生徒が述べていて、これはエージェンシーの責任感の側面だと思われます。

今後の検討点

- 「主体的な側面」と「責任感の側面」の2つが含まれる授業・活動がエージェンシーを育む可能性が示されているが、その他にはどのような側面を含めればよいか。
- 就学前、小学校、中学校、高等学校等で、どの時期にどのような学びをすることが重要か（発達的視点の必要性）。
- エージェンシーの発達をどのように見取るか（評価の視点の必要性）。

27

今後の検討点ですが、今お話ししたようにエージェンシーを育む教育というものには主体的な側面と責任感の側面というのはどうもありそうなだということがわかってきていますが、さらにほかの側面が必要になるのではないかということも考えられますので、どのような側面を含めればいいのかを検討していく必要があります。二つ目は、就学前、小学校、中学校、高等学校等でどの時期でどのような学びすることが重要か、発達的視点の必要性、これは木村先生がおっしゃっていたコンピテンシーやエージェンシーの話しをする際に、学校種によって先生方の反応がちょっと違うというところと関係すると思います。小学校段階、あるいは幼稚園ではどういうことをすればいいのか、高等学校、中学校ではどのようなことをすればいいのか、ということを考えていく必要があるかと思います。三つ目は、大きな課題ではありますが評価ですね、エージェンシーの発達をどのように見とっていくのか、評価というものを考えていく必要があると思います。

参考文献

- 松尾直博・翁川千里・押尾恵吾・柄本健太郎・永田繁雄・林尚示・元笑予・布施梓（印刷中）**日本の学校教育におけるエージェンシー概念について－道徳教育・特別活動を中心に－**，東京学芸大学紀要・総合教育科学系，71
- 松尾直博・柄本健太郎・永田繁雄・林尚示（印刷中）**「生きる力」とエージェンシー概念の検討－中央教育審議会の答申や学習指導要領を中心に－**，東京学芸大学教育実践研究紀要，16
- 扇原貴志・柄本健太郎・押尾恵吾（印刷中）**中学生における生徒エージェンシーの関連要因および中学生が重視するウェルビーイングの分野**，東京学芸大学紀要・総合教育科学系，71
- 扇原貴志・柄本健太郎・布施梓・翁川千里・松尾直博（印刷中）**日々の学習を通して得られる中学生のウェルビーイングと生徒エージェンシー**，東京学芸大学教育実践研究紀要，16
- 柄本健太郎・松尾直博（印刷中）**生徒と教師のCo-Agencyとは―共に学びを創ることの困難さ，必要な力と学校体制―**，東京学芸大学教育実践研究紀要，16
- Oikawa.C, and Oshio.K.（2019）**Agency to be Nurtured in Japanese Junior High School Classroom Activities.-focused on home economics and mathematics-**，14th International Consortium for Universities of Education in East Asia, Shaanxi Normal University, China, 18-20th Ocotber 2019.
  －（翁川 千里・押尾 恵吾（2019）**日本の中学校の授業で育成されたAgencyの事例-家庭科と数学の授業に着目して-**, 第14回東アジア教員養成国際シンポジウム, 中国, 陝西師範大学, 2019年10月18-20日.）
- 翁川千里・柄本健太郎・サイトウサキ（印刷中）**未来へすすむ～エージェンシー～**<http://www.u-gakugei.ac.jp/~jisedai/comic/>(2020年●月●日取得)